

## 平成 29 年度 第 2 回鶴見・あいねっと(鶴見区地域福祉保健計画)推進委員会 議事要旨

日時：平成 30 年 1 月 10 日（水）15：00～17：00

場所：鶴見区役所 6 階 8・9 号会議室

推進委員：小山委員長・八森副委員長

大野委員・押山委員・河西委員・烏田委員・河合委員・神保委員・高橋委員  
田中(志)委員・田中(博)委員・富樫委員・西澤委員・藤田委員・増子委員

事務局：区長、福祉保健センター長、福祉保健センター担当部長、福祉保健課長  
高齢・障害支援課長、生活支援課長、総務部長、地域力推進担当係長  
事業企画担当係長  
区社会福祉協議会事務局長、区社会福祉協議会事務局次長  
区福祉保健課、区社会福祉協議会

### 1 開会

- ・写真撮影の承認及び議事録のホームページへの掲載について確認

### 2 鶴見区長挨拶

### 3 議事

#### (1) 第 14 回鶴見・あいねっと推進フォーラムの開催について（説明：中田事務局次長）

- ・区社会福祉協議会事務局次長から説明。
- ・平成 30 年 2 月 24 日（土）13：30～16：00 鶴見公会堂にて実施。
- ・社会福祉功労者感謝会、基調講演「このまちでともに生きていく」（八森先生）、地域活動事例発表 3 団体（鶴見養護学校後援会、とちのきっず、認知症啓発「生麦劇団」）を実施予定。
- ・会場ロビーでは、例年のボランティアコーナー、「鶴っこ」製品の展示に加えて参加型イベント「鶴見・あいねっとの花をさかそう！」を行い、参加者から 10 年後の鶴見がどんなまちになって欲しいかを花びらのメッセージカードに書いてもらい、木の絵に貼りつけていき完成させる。

#### (2) 地区のあいねっと活動について

- ・福祉保健課事業企画担当係長より説明。
- ・今年度、区内で特徴的な取組だった 3 テーマに沿って活動紹介。

#### ①認知症 SOS ネットワーク模擬訓練（矢向、市場、生麦第二地区）

矢向・鶴見市場地域包括支援センターの担当区域内的の医療機関、訪問看護・訪問介護事業所、入所施設等が集まりこれからの地域包括ケアについて考えていくネットワークの「川のまちエリア会議」の取組の 1 つとして認知症 SOS ネットワーク模擬訓練を実施した。実際の徘徊を想定したシチュエーションとして、地域の人が認知症徘徊者役と声掛け役となって行い、約 90 名の参加があった。参加者の声として、外見で判断するのは難しく、訓練参加者でない人に声を掛けてしまったケースもあった。

また、生麦第二地区でも同様の模擬訓練を実施し 58 名の参加があった。こちらの取組で特徴的なものは、パナソニックが開発した地域情報を共有することができるスマートフォンアプリの「SOYLINK」を活用して訓練を実施した。参加者

からは、操作に不慣れで苦戦したが、命令して徘徊者を探してもらうのではなく、自然と徘徊者へ目が向くような仕組みがよいといった意見があがった。テスト段階の取組のため、今後ブラッシュアップされていくと思われる。

## ②地区フォーラム、懇談会（矢向、寺尾地区）

矢向地区では、あいねつとを身近に感じてもらうための地区フォーラムを開催し、日々の活動で取り組んでいることや活動の中で感じていることについてグループワークで話し合ってもらった。矢向地区の特徴として、推進委員のメンバーだけでなく、民生委員、小学校のPTAやサポーターズ、保育園の園長先生等、様々な人がフォーラムに参加している。参加者からは、多様な活動が横につながる良い機会になったという感想が聞かれた。

寺尾地区では、各町会で取り組んでいる一押しの取組をプレゼンテーションしてもらう地区懇談会を開催した。プレゼンテーション終了後に意見交換を予定していたが、時間が足りなくなってしまうくらい内容が非常に盛り上がった。町会ごとの特徴や工夫がよく分かり、横のつながりをつくるよい機会になった。

## ③自閉症の方の理解を深めるための講演会（豊岡地区）

豊岡地区では障害者への理解を深める啓発講座を昨年度も実施して好評だったため、引き続き今年度も実施した。今回は自閉症をテーマに、「つるみ地域活動ホーム幹」の施設長や施設利用者本人やご家族の方にお話しいただいた。また、ペットボトルを半分にしてそこから覗き、自閉症の人が実際にどういう視野なのか体験する機会も設けて理解を深めた。

### （進行役）

3つのテーマに沿った取組について話してもらいましたが、必要な人に支援が届く仕組みづくり、支援者同士がつながっていく取組、1つの団体が1つのことをテーマにしながらつながっていくといった活動内容を紹介してもらいました。

矢向地区の取組が2つあがっていましたが、まず徘徊模擬訓練について様子や参加者の反応やこれからの広がりについてご意見いただければと思います。

### （委員）

SOSネットワークの状況についてご紹介します。もともと「川のまちエリア会議」という汐田総合病院の室長が中心となり、矢向地区と市場地区の包括支援センターのエリアで地域の施設や事業所も含めて地域包括ケアに取り組むネットワーク会議がありました。この会議が3年目を迎えた中で模擬訓練が必要だという意見があり、やってみるようになった。消防や警察、区役所にも協力してもらい大々的に行い、矢向地区の町会長が市場地区で、市場地区の町会長が矢向地区で徘徊者になって町会の人たちがそれぞれ声を掛けるという形で実施した。徘徊者役が季節感の違う服装を着てみるなど工夫されていたが、なかなか見つけるのが難しく、一般の方に声を掛けてしまうこともあった。参加した方からは、実際にやってみて声掛けの難しさを感じたという意見やどういった風に声掛けをしたらよいかを考える機会になったという意見もあったのでとても良かった。

### （進行役）

声掛けといっても実際にやってみないとどうしたらよいか分からないし、模擬訓練ということでやってみると練習になり、実際の時にも声掛けができるようになると思います。

引き続きとなりますが、地区フォーラムについても矢向地区は様々な団体が交流したということでしたが、当日の様子や感想についてお願いします。

(委員)

昨年度、矢向地区のあいねっと推進委員の中で、委員は集まって話し合っているののであいねっとについて理解しているが、地域の人の中ではあいねっとへの理解が進んでいないのではないかという意見があり、あいねっとの取組を広げていくには地域の人にも会議に参加してもらうのがよいという話になった。そのため、今年度地区フォーラムをやることになった経緯がある。

先ほど紹介にあったようにPTAや民生委員等のいつも会議に出ている人ではない様々な人に声掛けをして60名あまりの方々が集まり、1グループ8～9人ほどで話し合いをした。世代もバラバラで活動しているグループも違う人達なので、普段関わりのない人と話す機会になったのはすごく良かった。そのため、あつという間に時間も過ぎてしまい、話し合いの時間が短いのがもったいなかったという意見もあった。今回の地区フォーラムに参加した人はあいねっとを知る機会になったが、まだ参加していない人はたくさんいるので、今後もこういった場を続けていくことが大切であるという結論になり、来年度も続けていきたい。

(進行役)

活発な会議だったようで、こういった取組がいろんなところで継続的に続けられていくことが重要ではないかと思う。

今、認知症徘徊者のネットワークとそれぞれの支援者の交流ということで徘徊模擬訓練と地区フォーラムについて話をしてもらったが、様々な意味での見守りということでは民生委員として活動されていると思いますので、徘徊模擬訓練も含めて聞いていることや他にもこんな取組があるというものがあればご紹介いただきたい。また、先ほどの話でスマートフォンアプリを使った見守りもあるということに関してご意見等いただきたい。

(委員)

模擬訓練で一番問題になったのは、発見が非常に難しいということ。本当にこの人が認知症なのか判断が難しいので、とりあえず声を掛けてみるのが大切である。

また、認知症の人を発見した際にどこにつなげるのがよいのかということが訓練をしていないと分からない。警察、消防、包括支援センター、区役所等どこへつなぐのか判断をいち早くする必要があり、訓練を通じてできるようになるため、実地訓練が大切である。

(進行役)

実際に声掛けをしてみると難しいため、模擬訓練が良い練習の場で実際のイメージを持つことができたという話でした。

続いて、認知症の方やその介護者の支援という立場として、声掛けの仕方等、日頃感じていることや皆さんに知っておいて欲しいことがあればお願いします。

(委員)

模擬訓練には見学者として参加した。矢向地区では徘徊者の靴が左右違う、季節感と違う服装をしている等工夫をしていた。また、声掛け役の人数が多くて認知症役を取り囲むような形になっていたところ、少し移動して対応するよう工夫していたので良かった。川辺で実施した市場地区では間違って訓練参加者以外へ声掛けをしてしまったが、

「何か釣れますか」「何か魚でもいますか」「よい天気ですね」と自然な形で声を掛けていけば、相手に悪い気分を与えない。

アプリを使用した生麦第二地区の訓練では、使い方に慣れていないため苦戦していた。また、訓練だと大勢で声掛けしてしまうところは対応として厳しかったが、実際は1対1や1対2というケースになると思う。

そのときにおかしいなと思うところがあれば、勇気を出して声を掛けるのが大事である。声を掛けるときは後ろからではなく正面から「こんにちは」「いい天気ですね」「お買い物ですか」といった自然な声掛けをすると良い対応ができる

(進行役)

話にあったように後ろからではなく正面から声を掛けるといったような対応を事前に勉強していたと思うが、そのような対応が模擬訓練を実施する中でマニュアル化できてくれば、普段認知症の方と関わりがないような人でも声を掛けやすくなり、認知症の方や高齢者の方への接し方の啓発にもなるので、取組が広まっていくとよい。

他に模擬訓練に参加された方はいますか？

(委員)

認知症役の人に熱演いただき非常によかった。先ほど、一般の人に声を掛けてしまって失敗したという話があったが、個人的には違うと思う。「こんにちは、今日は釣りですか」と声を掛けてみたところ、釣り道具の袋は持っているが中身が入っていない。ただ、話してみるとおかしくはないという状況だった。そのため、帰りにまたいたら声を掛けてみようということになった。

まず声を掛けてみて言葉を交わすことが大切である。日常的な会話なら間違えていても失礼なことにはならない。実は認知症役の方は投票日の過ぎた投票案内を持って歩いており「これから投票に行く」という演技をしていた。警察へ連絡するときは1人が会話しながら対応して恐怖感や威圧感を与えないことが大事である。外見で判断するのは非常に難しいので、とりあえず声を掛けてみて会話をしながら判断するしかない。

(進行役)

ありがとうございました。

では続いて3つ目の自閉症の講演会を実施したという話についてですが、参加者から当日の様子などお願いします。

(委員)

豊岡地区では2回目の取組になるが、毎回、施設の人だけでなく家族会の人も来られて、家族の立場の話をされるので実感のこもった話を聞かせてもらった。高齢者や認知症の人だけでなく、自閉症の人も含めてどう接したら良いか考える機会になった。講演会の話の内容を各町会へ持って帰ってもらい、高齢者ではない人でも老人クラブの集まりにきてもらうように声を掛けたりしている。

(進行役)

色々な障害がある中で、その入口として自閉症の特徴を理解し、こういう対応をすればお互いに良い気持ちでつながりやすいということを知ることができる機会になったのではないかと。専門職種と家族という立場の違う人が話すことによって、支援をつなげられることができる講演会が続いていくとよいと思います。

今、3つの取組について話をしてもらったが、これからは次の議題の意見交換へ移りたいと思います。

### (3) 話し合い ～つながりのある地域づくり～

今回の話し合いのテーマは第3期計画の推進の柱①「つながりのある地域づくり」です。

前回、7月の推進委員会では推進の柱②「必要な人に支援が届く仕組みづくり」について話し合い、「支える側の高齢化の問題」、「潜在的な障害に困っている人の問題」、「地域も交えた民生委員の見守りの在り方」、「障害者が地域で生きるということの理解を深めること」、「活動の担い手や参加者を増やすにはどうしたらよいか」等、色々な意見をいただき課題が浮かび上がってきた。その話し合いの中で、「定期的に繰り返して継続していくこと」、「大きな問題になる前に、前もって早い段階で関わること」、「情報の共有についてもっと踏み込んでいき様々な人と連携すること」、「地域で生きるという視点を持つこと」が重要であるという話でした。

今回は、フォーラムでも取り上げる「地域で生きる」ということに着目して、「つながりのある地域づくり」をテーマにしながら、地域の中で様々な人たちの顔が見える関係、気持ちが理解できる関係づくりを進めていくことについて意見をいただきたい。

まずは話し合いの参考事例として行動目標①「世代間の交流を進めます」行動目標③「幅広い住民の参加を促し、地域活動の担い手を育てます」に沿った寺尾第二地区の取組を事務局から紹介をお願いします。

#### ① 寺尾第二地区 ～声かけ応援隊の活動事例～

・区社会福祉協議会事務局長から説明。

寺尾第二地区のあいねっと第3期計画のテーマは「世代を超えて 未来につなごう 地域の輪」。このうち、目標1「老いも若きも思いやりの心を育てよう」の中で「自分から積極的に挨拶する」という具体的取組を設定し、地域の人とつながるためには自ら挨拶をするように目標を立てた。

28年度の地区懇談会で目標達成のためにはどういう取組をしたらよいか話し合ったが、積極的に挨拶することは大事だがハードルが高く、見ず知らずの人が子どもに声を掛けると怪しまれてしまうため、地域で挨拶運動をしていると分かるものがあると良いという意見があった。そのため、声かけ応援隊の缶バッジを作製し着用して声掛けを行ってはどうかという話になり、寺尾第二地区の地区社協が母体として取り組むことになった。小・中学校にも協力依頼し、缶バッジのデザインを公募した。応募が23件あり、半数の12件は児童の作品だった。その後、選定委員会を開催し、デザインを3件決定。作製は障害者作業所の「工房金魚」にお願いした。また、完成後に表彰式と懇話会を行った。

今後の活用方法として、寺尾第二地区の北寺尾町内会では、見守り応援隊があるので全員バッジを着用して活動している。他の町会でも今後取り組んでいく予定であり、地域が前向きに取り組んでいる。地区懇談会であがった一つのアイデアを拾い上げて取り組んだ事例である。

#### (進行役)

あいねっとの話し合いの中で出てきた一つの提案を、みんなで話し合い形にして作り上げた。見た目で見やすい缶バッジで、色々な方への参加と啓発、新しい人の参加を求めるためのデザイン公募という手段で取り組んだ事例でした。

では、事例も参考にしながら「つながりのある地域づくり」について各委員が取り組んでいる活動やこんなことが取り組めたらよいのではないかという意見等をお願いします。

(委員)

これまでの話の中で認知症の方に声を掛ける技術を磨いていかなければならないと感じた。自分は下校見守り活動をしているが、こちらから小学生に声を掛けることによって話しかけやすくなってきたと感じている。こちらから声を掛けるということをさりげなく日常の中でしていくことが大事だと思う。

(進行役)

つながりづくりには意識して自身から声を掛けていくことが大事で、そのうえで、声掛けの対象者に則した話し方があるのであれば、その技術を学びながら声掛けをしていくと相手にとっても心地の良い話し方になる。

(委員)

障害児のことについて、保育士の仕事をするときには勉強するが、実際に職場で障害児を預かると戸惑ってしまうのが現実である。どう言葉をかけたらよいのか、保護者に対してどうすれば失礼ではないのか、勉強しただけではよく分からない。これには経験が必要で生の声を聴くことが大事だと感じる。障害児の研修では、大学教授の話よりも障害児の母親の話の方が「こんな普通のことか」ということを理解できるようである。自身の施設のスタッフでも障害児を預かるのが怖いという人もいる。その場合にはスタッフを責めるのではなく、そういう風を感じるのかと受け止める。怖いと言っていたスタッフも障害児の母親から話を聞くことで段々と普通に接することの意味が分かってくる。伝える場を求めている障害児の母親も多いと思う。

(進行役)

どうしたら失礼がないかと色々考えてしまうと声をかけにくくなってしまう。実際に障害児の母親から接し方について聴くと、それぐらいの対応ならできると少しずつ分かってくるようになる。障害児に限った話ではないが、当事者や家族から話を聴く機会があれば理解が進んでいく。

(委員)

声掛けについては、笑顔で「こんにちは」と声掛けして気分を悪くする人はまずいないので声掛けする態度が重要だと思う。地域で保育付きのエアロビ教室をおこなっている。初めてきた子どもはずっと泣いている子もいるが、2回目からは大丈夫になってくることが多い。子どもの声が聞こえると母親は気になってしまうので活動場所と保育部屋は一つ部屋を挟んで行うようにしており、母親の健康づくりと子どもの親離れの2つの目的がある。

担い手については、この活動なら参加したいという人はいるので、いくつもの活動を提案していくことが必要である。その参加者の中には得意分野を持っている方がいるので、そこから新しい担い手になってくれる。担い手不足だとよく言うが、担い手がいけないのではなくて、担い手を探せていないだけである。

(進行役)

先ほど声掛けの技術という話があったが、その具体的なものとして表情や態度が重要という話でした。それから、担い手を増やしていくということについては、活動の種類を増やしていくことで、それぞれの人が持っている得意分野を活かすことができるという話でした。

(委員)

老人クラブの活動だけでなく、地域の中で見守り訪問活動もしている。老人クラブとしては、高齢者の寿命が年々延びており、昔と比較すると高齢者に時間を持て余している人がいる。前期高齢者であれば、まだまだ元気なのでそういった人を活用して地域で何かできないかと2年ほど前から考えている。単会で埋もれている少数の若手も地区全体でまとめれば多数になる。どういう仕組みにすれば活動できるかについては若手を集めて勉強している最中である。ボランティア等で活動したいと思っている人は潜在的にはいるはずなので取組を進めていき形にしたい。

(進行役)

活動意欲がある人をある程度広い範囲の中で集めてスケールメリットを活かした仕組みを作ってこれから活動できたらよいという話でした。老人クラブの活動と色々な団体の活動が一緒になってつながっていくと良いと思いますが、ボランティア団体との活動のつながりはどうでしょうか。

(委員)

高齢者の生活支援については一部活動しているが、担い手が少なく困っている。先ほど話のあった老人クラブの若手の方々は、何かしらの技術を持っていると思うので活用できる場はたくさんあると思うのでグループ組んで活動できるとよいと思う。

(進行役)

一緒にグループを組んで活動できると面白そうと感じる。次回、また報告が聞けると嬉しいと思います。

(委員)

介護者の会では、3年前から区内のケアプラザ、自主グループ、キャラバンメイト、区役所、区社協等の協力を得ながら、年1回交流会を実施しており、今年度は17団体が参加した。それぞれの団体から実施方法について発表してもらい、地域ごとに違うので参考になったという意見が聞かれた。交流会について今後も必要か参加者にアンケートをとったところ、全団体から必要だと回答をもらった。また、もう少し細かく意見交換できたらよいという非常に前向きな意見ももらい、介護者グループの横つなぎができてきたと感じている。本当に介護を必要としている人や介護で悩んでいる人に1人でも多くつなげていくにはどうしたらよいかということは今後も課題である。あと、子どもと暮らしているが、子どもは働いているので日中一人暮らしになってしまう人たちがどうしたらいいのかこれから考えていかないといけない。

それから活動の担い手について、介護のOBになった人が世話人として残ってくれて各ケアプラザ等で開かれている介護者の集いに手分けをして参加している。自主グループの介護者の集いにも参加し、色々な情報交換を行い、区全体の動きを把握して、区役所や区社協につなげていけたらいいと思う。ひとりひとり誰も見落とすことのないようにネットワークを広げていきたい。

(進行役)

介護者の横つながりを実践させながら、見落とすのないように細かく網を張って活動しているということでした。逆に他の活動団体と取り組んだ事例やこれからの計画はありますか。

(委員)

次年度以降の話になるが、ケアプラザや豊岡商店街で認知症カフェを立ち上げるという話が進んでいる。介護者の会でも土日に実施している認知症カフェが少ないので、OBの世話人にも協力してもらい月1回の実施を計画している。

それから、認知症カフェマップを作れたらいいという話は出ており事務局で検討しているので区社協に協力してもらって進められたらよいと思っている。

豊岡の認知症カフェは、2月17日にふれあい館を借りて第1回を実施するのでご参加をお願いします。

(進行役)

色々な町会や老人クラブ等ともつながり、区社協のバックアップも得ながら進めていただければと思います。

ちなみに認知症カフェは横浜市内でも他にもあって、私も認知症施策検討委員会のメンバーなので、会議の中で認知症の当事者はあまり来たことがないという話を聞いたが、鶴見区の場合はどうでしょうか。

(委員)

鶴見区は当事者と介護者が一緒に参加しているケースはいくつもある。今日も鶴見市場で介護者の集いがあったが、そこでも認知症の奥さんを連れて介護者の旦那さんが参加していた。

(進行役)

案外、認知症カフェには認知症の人が来ないという課題が全国的にあるので、鶴見区は素晴らしいと思います。

(委員)

豊岡の認知症カフェの立ち上げ経緯は、旦那さんの介護をしている奥さんを地域で支援したいという思いから町会が動いてくれた。

(進行役)

認知症だけに関わらず、そういった交流の場が広がっていくと良い。市内でも認知症の人が参加している認知症カフェは相当少ないと思うので、取組を盛り上げていってもらえればと思います。

それでは引き続き、各委員から普段の活動を通じてつながりを意識した感想やご意見をいただきたいと思います。

(委員)

つながりという意味では、子どもから高齢者まで障害者も含めた多くの人に参加できる行事を企画するのがよいと思う。自分の地域では35種類くらい行事がある。例えば障害者と健常者が一緒に行うカラオケ大会があるが、こういった行事をするには、町内会館やケアプラザ、小・中学校のグラウンド等の場所の確保が必要である。そして多くの人に周知して参加してもらうことに尽きる。また、例えば子ども関係なら小学校と協力して田んぼづくりをやって秋になったら刈り取るという先生も巻き込んだ行事がある。それから、高齢者ならバスハイク等を企画して1人でも多く参加してもらってつながりをもつ。他にも花壇の手入れ、草取り、花植え等、行事を多くやって多くの人に参加してもらうことが大切。それには場所の確保が必要だし、お金をかけずにボランティアでやってもらう。皆さんの参考になればと思う。



(進行役)

ケアプラザや学校、町内会館等の場所は行事を企画するメンバーで探して声掛けして確保しているのか。

(委員)

そのとおり。ダンスの行事をやるときはダンスが好きな人にチーフになってもらう、子ども関係なら元保育士の人をお願いしたり、配食であれば料理のできる主婦の方をお願いする。そして当番制をつくって組み合わせてもらい、継続してやるのが大事。配食は一部材料費を払ってもらっているがお金をかけないでやっている。それでも足りないときは区社協の助成金を活用して頑張っている。

(進行役)

よく担い手が不足しているという話になるが、その点はどうしているのか。

(委員)

顔を合わせて笑顔でお願いするしか手はない。自分の好きなことなら必ず担い手になってくれる人が1~2人はいる。新しく行事をやる場合は、この人ならやってくれるだろうという人をお願いすると、その友達が3~4人ついてきて一緒にやってくれる。担い手は70歳代~80歳代の元気な高齢者で60歳代なら若手である。祭り等の大きい行事のときくらいだが、40歳代で活動に協力してくれる人もいてありがたい。期待という意味では、つながるためには若い人も必要なので小学生の頃からボランティア活動を通じて地域活動に参加しやすいようにしている。

(進行役)

担い手を増やす秘訣は、様々な活動の種類を増やしていく中で担い手になってくれる人を見つけて笑顔でお願いするとうまくいくとのことでしたが、的を射ていると思います。

(委員)

保健活動推進委員として、地域の人が明るく楽しく過ごして欲しいという思いで活動している。認知症についても、以前、あいねっと推進フォーラムでも発表させてもらった人形劇を通じて、保健活動推進委員のメンバーと共に毎年啓発活動をしている。昨年は東寺尾のどろんこ保育園にて園児を対象に「ご飯まだ？」という人形劇をやらせてもらった。町会の高齢者と園児の交流する機会があった際に、園児が高齢者の手を見て「汚い」と言っており、ビックリしたことがきっかけである。園児は普段高齢者と接する機会がなく、お母さんの綺麗な手しか見ていないので、しわのある手を見てビックリしたようだ。そのため、園長先生と町会長と話をし何かしら交流を持ちたいという話になり、認知症の人形劇をやっているのをやってみようかという話になった。セリフも園児向けのものに変更して、人形劇は園児たちから好評で「また来てね」と言われた。園長先生からも1回きりでなく、時々園児たちと遊んでほしいと言われた。先生とは違う大人とのふれあいによって、園児たちの普段と違う表情を見ることができたようで、これからも続けていきたい。

それから生麦第二地区で行った認知症徘徊者の模擬訓練に参加したが、アプリの使用に慣れていないため、練習したがうまくいかなかった。続けてやって慣れていきたい。

(進行役)

高齢者と子どもとのつながりを認知症の人形劇を通じて行った良い事例だと思います。

(委員)

鶴見区障害児・者団体連合会には現在34団体があり、各活動ホームや作業所で色々活動している。自分が事務局に入ったときは15団体だったが、現在は団体数も人数も倍以上になっているので、鶴見区で障害児・者が増加しているのが分かる。

各団体では、区役所や区社協、ボランティアの協力もあり、大きな行事等で活動することができており、周りの人が障害者の様子を知る機会がある。しかしながら、各個別の家庭に戻ると大変で、バスに乗ったり、地域の人とコミュニケーションをとるだけでも気苦労が多い。行事のときに関わってくれていても、普段だとまた様子が違うので周囲の理解を得るのが大変である。声をかけてくれた人には現在の状況を個別に説明したりするように努力している。

(進行役)

各個別の家庭に戻ったときに、近所の人に理解してもらうことが難しい様子であるが、どんどん理解している支援者が増えていき、つながりを実感できると良いと思う。

(委員)

話の本筋から少しずれてしまうかもしれないが、直近であった民生委員をやっていて嬉しかったことと、がっかりしたことについてそれぞれ話したい。

まず、嬉しかったことについては、自分が担当している女性の高齢者で息子と暮らしているが、息子は働いているので朝家を出たら夜遅くまで帰ってこないで、家も汚くて匂いもきつい環境である。訪問時にケアマネジャーや医者等にも来てもらったが、すぐに病院に行かないとダメだということになり救急車で搬送することになった。救急隊からは、どこの病院に行くということも教えてもらい、自分は息子と連絡が取れるように、帰ってくるまで待っていてつながることができた。残念ながら、結果としてその方は亡くなってしまったものの、関係機関との連絡は非常に良好だったので、つなぎ役として関わられてよかったと感じた。

一方で、がっかりしたことについては、区役所から連絡がつかない人がいるので確認して欲しいと連絡があった際に、なかなか本人と連絡が取れないことがあった。その後、大家さんと連絡がつき現場に行ったら、偶然本人に会えたので、話を聞いたところ「大丈夫だ」と答えていたので、区役所にも報告した。しばらくして、また区役所からその人と連絡がつかないという連絡があり、確認していたところ、今回は警察が介入しているようだった。警察に話を聞いてみると、その人の長男と連絡をとり、しばらくここからはいなくなると言われた。自分が民生委員の身分であることを告げて、区役所からも確認を頼まれていることを言っても「そうですか」という返事だけであった。なんで1週間もいなくなるのか、病院等へ行くからいなくなるのか、心配して見守りしているのに冷たくあしらわれるのは納得いかない。見守りする以上は、最後までその人がどうなったのか確認をすべきであると考えている。あいねっとの目標にもあるように関係機関との連携をしていこうとしているのに、警察のこのような対応には不信感が募る。警察側が個人情報だから伝えられないという理屈は分かるが、もっと連携できるように考えて欲しいと感じた。

(進行役)

独居や親族が遠方に住んでいる高齢者の見守りをしていて、報告しているのに逆に返

答がない。みんなで見守っていくために連携してチームとして活動しているのだからフィードバックが欲しいという話でした。やり方については、確認をすると良い方法が見つかるかもしれないので、今後どこかで議題として取り上げていきたい。

(委員)

地域の自治会町内会の協力もあり、わっくんひろばのサテライトを尻手で開設することができた。利用者アンケートでの満足度は高く、来所するお母さんたちはアンケート用紙にたくさん書いてくれている。「スタッフに声をかけてもらってよかった」「相談をきっかけに悩みが解決できてよかった」という声が多い。

世代間の交流という意味では、細々と取り組んでいるものの、現状はまだまだ足りていないと思っている。取組としては、豊岡小学校の2年生が町探検ということでわっくんひろばのことを調べる機会があった。子どもたちからたくさん質問があり、「遊ぶ場所なのになんでスタッフ必要なのか」といった子ども目線ならではの発見があった。「お母さんは子どものことが大事だけど、悩みながら子育てしているから、スタッフが相談を受けている」と話すと、子どもたちは母親が子育てで悩んでいることに驚いていた。また、見学に来ていた小学生は赤ちゃんのときにわっくんひろばを利用していた子どもたちで、お母さんたちが悩んでいるところも見ていたので、成長してわっくんひろばのことを調べにきてくれていることに感動し、発表会に呼んでもらったときは泣きそうになってしまった。

自分たちの中では、同じ子どもではあるけれど、就学前と就学後の子どもでは、世代が違うという認識なので、交流をもてたことは良かったし、小学校を巻き込むと色々な面白いことができると実感した。

それから、わっくんひろばに来ているお母さんたちは、スタッフから見るとサポートが必要な人たちという認識でいるが、その場に小学生が4～5人加わると、非常に親切に優しく対応していて、悩みを抱えて大変な人というだけでなく頼りになる力のある人であることに改めて気づかされた。その中に、小学生に興味を示さないお母さんが1人いて、スタッフがおかしいと感じて声を掛けてみると、話を聞いているうちに泣いてしまった。産後鬱だったようで関係機関へつなぐことができたが、小学生がその場にいなければ、反応がおかしいことに気づかなかったと思うので、子どもからは色々気づかされることが多いと感じた。

(進行役)

子どもには色々な人をつなぐ力があると思いますので、これからも頑張ってもらいたいと思います。

(委員)

現在、地域づくり等のつながりを持って活動しているものはないが、精神障害を隠すことはやめようという話はしている。逆に周りからも声をかけてくれると嬉しい。

それから個人的に思うこととして、公道、私道に関わらず自分の家の前の道路は自分で清掃するとよいと思う。日常的に清掃で顔を出してくれると声をかけやすい関係になるのではないかな。

もう1つ、交通ルールについて「人は右、車は左」ということを守らない人が多いと感じている。逆走している自転車がが多く、車を運転していても、歩いていても怖い。跨線橋のエレベーターについても自転車から降りてくださいと書いてあるにも関わらず、自転車に乗ったままエレベーターに乗ってくる人が多い。まちづくりは交通ルールからという面もあると思うので、守らないといけないルールを守ることから始めて欲しいと思う。

(進行役)

安全やマナーの話の他に、声を掛けられるきっかけづくりとして「清掃」という1つの案をいただきました。

(委員)

矢向地域ケアプラザでは、「一人暮らしの見守り」をテーマに地域ケア会議を行った。会議の中で、どういう人が認知症になっても高齢で一人暮らしをできているのか考えたときに「見守られ上手」であるという意見が出てきた。やはり、何かしらのつながりがあって、例えば三味線のお師匠さんで認知症になっても弟子をとって教えている人。あるいは、愛嬌のある人で毎朝必ず雨戸を開けていて、近所の人に「もし、雨戸が閉まっていたら私の家に入って」ということが言える人。このような人は認知症になっても一人暮らしをしていける人だということがよく分かった。このような人は90歳になってそういうつながりができたのではなく、50~60歳の頃からそういうつながりがあったのだと思う。地域で生きていくということは、若いうちから何かしらのつながりをもっているということに改めて認識した。

(進行役)

ありがとうございました。では最後の方、お願いします。

(委員)

地域ケアプラザとしてつながりが一番重要であることを認識して仕事をしている。潮田エリアでは、近所にどういった方が住んでいるのかを見える形にしていく「地域の見守りマップ」を作成した。見守り活動が可視化され、活動を継続していくことで何かしらの地縁のきっかけになるように引き続き取り組んでいきたい。

(進行役)

委員長からは最後に総括していただくこととして、ここまでの内容を少しまとめていきたいと思います。

「つながりのある地域づくり」ということで4つの行動目標に触れて話をしていたところですが、1つ目の世代間の交流については、様々なご意見をいただきました。2つ目の関係機関との連携では、具体的に現在つながっているところやこれからつながりを強めていくべきところの話、それから警察を含めた見守り体制の課題も提案していただきました。3つ目の幅広い住民の参加では、たくさんの種類の活動、行事等を広めていく中でキーになる人を逃さずに見つけて笑顔でお願いすると、そこから芽づる式に何人か連れてくることができるという話がありました。4つ目のコーディネーター育成については、技術についていくつか話がありましたが、これからの課題として議論の場をまた設けられればよいと思います。

それでは、これらの話を参考にしながら第3期計画の啓発や具体的な実施につなげていただければと思います。

次の議題の「つるみ・地域元気づくり事業について」の説明を事務局からお願いします。

#### (4) つるみ・地域元気づくり事業について

- ・地域力推進担当係長から説明
- ・例年通り、「つるみ・地域のつながり応援事業補助金」と「つるみ・元気アップ事業補助金」の対象団体を募集する。

(進行役)

これにて予定していた議題は終了ですが、連絡事項等ありますか。

(事業企画担当係長)

事務局から連絡事項ですが、お手元に桜の花びらのメッセージカードを配布しています。先ほど説明したとおり、推進フォーラムで行う「鶴見・あいねっとの花をさかそう！」の取組で使わせていただきますので、時間が許すようであれば記載してください。もちろん、推進フォーラム当日に記載してもらっても構いません。

(進行役)

それでは、委員長にマイクをお返しするので本日の総括をお願いして終わりにしたいと思います。

(委員長)

熱心なご討議ありがとうございます。色々とお話しいただき皆さんのご苦勞がよく分かりました。

声掛けが難しいという話もあったが、勇気を出して声を掛ければ、高齢者でも若い人でも必ず返事は返ってきます。全然知らない人への声掛けは返事があるまでに2～3年くらいかかるかもしれないが、長い時間をかけて継続して取り組めば返事があることは、自分自身が体験しているので皆さん安心して声掛けをしてください。

それから自分から声をかける際には、子ども相手でもその人の目線の高さに合わせて同じ目線で話すことが非常に大事だと感じています。

本日はありがとうございました。

#### 4 閉会